

凄六

—SUGOROKU—

中野
劇団

『凄六』(SUGOROKU)

作・中野 守 (中野劇団)

登場人物

沖田 (女…二十五歳、担当 音楽)
永倉 (男…三十二歳、担当 化学)
斉藤 (男…三十七歳、担当 体育)
松原 (男…二十三歳、担当 数学)

闇の中に声が響く。

沖田 取扱説明書。

永倉 対象年齢、十三歳以上。プレー人数、四名。

松原 セット内容、双六盤、賽子、駒、取扱説明書。

斉藤 すべてのマスには銀はがしの要領で命令が書かれています。そこにかかれた命令

に従いながら、あがりまで辿り着いて下さい。

沖田

命令をクリアしなければ、次のプレイヤーは賽を振ることが出来ません。

永倉

一度開かれたマスであっても、止まったマスの命令には従って下さい。

松原

あがりはおーバーしても構いません。

斉藤

なお、途中棄権は出来ないのをご注意下さい。

間。

沖田

みぶろ中学校職員室。

永倉

三学期終業式の日之夜。

松原

但し、その夜が始まったのは途方もない昔。

斉藤

終業式の日だったということさえ忘れてしまいそうな昔。

沖田

現在、午後七時三十五分…。

職員室に四人の教師。

赤、青、黄、緑の四色の双六の駒が置かれ、沖田、永倉、斉藤、松原の四人が重い空気の中、双六を

している。四人は憔悴しきった表情。松原は無精髭を生やし、腹痛を煩っている。

齊藤 『もう一度賽子を振り、出た目の数だけ戻る』。沖田先生、もう一回だ。

女性教師の沖田は、齊藤に手伝われながら、大きな賽子を転がす。因みに沖田は、

齊藤 三（出目の数。以降同様）。

沖田、自分の駒を持つ手を、じっと動かさずに思い詰めた表情。

齊藤 沖田先生。三マス戻して。

沖田、動かそうとしない。

齊藤 沖田先生。

沖田 ……嫌！

沖田、自分の駒にしがみつくが、まるで駒が沖田を引きずるようにして三マス戻る。

沖田 …いつまで続けるの？

間。

沖田 いつまで続くのよ、こんなこと。

斉藤 あがりに辿り着くまで。ルールは何度も説明した。…銀を剥がして。

沖田、銀を剥がす。

松原 『日本国憲法の全文を暗唱する』

永倉 ゼンブンってどっち？ 前？

松原 …全て。

沖田 できるわけないだろ！ ふざけないでよ！もう嫌！

沖田、感情に任せて泣き叫ぶ。

齊藤 ……どうだろ。今日はここいらが限界みたいだ。続きは明日に。

松原 ……じゃあ、駒の位置記録します。

永倉 それ、俺がやっとくから。松原先生、今日、飯番。

松原 あ、はい。イテテ。痛み止めまだ保健室に残ってたかなあ。

齊藤 毒なんか盛るんじゃないぞ。

松原 一番苦しそうなに入れておきますよ。

松原、職員室を出る。

永倉 ただの憎まれ口でしょう。四人の誰が欠けても困ることは彼も重々心得ているはずですし。

沖田 来る日も来る日も賽子振って、駒動かして、賽子振って駒動かして賽子振って！

いつまでこんなこと続けなきゃいけないのよ。

齊藤 沖田先生。悪く考えん方がいい。あがりに辿り着けば終わりは来るから。もう一

度太陽を拝める日が。

沖田 それだって根拠があるわけじゃないでしょ。

斉藤 眩しいんだろうなあ。目潰れるんじゃないか。

沖田と斉藤、職員室を出る。永倉、自分の席に座り、天井を見つめている。煙草を吸おうとするが、空箱で、永倉はそれを壁に投げつける。

永倉 太陽か…。

回想。職員室。机の上にはスナック菓子や酒類が置かれている。全員、まだ普段の自分を失っていない。沖田、駒を進めて、財布から一円玉を出し、銀を剥がす。

沖田 『さーらに四マス進む』。ふー。

松原 幸先いいスねえ。

斉藤 普通の双六だよ。脱ぐ系とか多分入ってないだろう。それはそれでつまらないけど。

沖田 松原くん。これ、四つ進んだマスの銀も剥がすの？

松原 ええと、ちよっと待って下さい。取説取説。

松原、取説を読む。

松原 ああ、そうみたいですネ。

沖田 ええ？

沖田、銀を剥がす。

齊藤 『十秒以内に「赤巻紙青巻紙黄がきまき」を二回言う』

沖田 先生言えてないし。

齊藤 じゃあ測るよ、せえの。

沖田、赤巻紙青巻紙黄巻紙を早口で三回言う。十秒以内に言えるまでやり直し、言えたら終了。

沖田 はい次、永倉先生。

スピーカーから鐘が鳴る。全員、素早く酒類を隠し、仕事をしているポーズ。

沖田 誰か放送室にいるんじゃないんですか？

斉藤 いや、見回したときは誰も…。普段なら野球部や居残り研究会が残っていてもおかしくない時間帯なんだがな。

松原 ちよつと見て来ます。

松原、走って職員室を出ていく。因みに放送室は職員室の隣にある。

斉藤 別にまだ金動かしてないし。

沖田 教師が双六でお金掛けてたなんてバレたらどうなるか…。

永倉、賽を振る。

永倉 『出目の数』。

松原、戻って来る。

松原 中、誰もいませんね。鍵かかっているし。

沖田 放送部の子が消し忘れてったのかな。後で消してきます。

斉藤、賽子を見つめながら、誰の所有物なのかとか独り言を呟いている。

永倉 永倉 『三回回ってワンダホーと言っ？ 大したこと書いてねえな。』

永倉、指示に従う。クリアした所で再び鐘が鳴る。

沖田 チャイム壊れてるのかな。

永倉 斉藤先生。

斉藤、駒を振り、止まったマスの指示を読み上げた後、指示に従う。するとやはり鐘が鳴る。

斉藤 (急に大きな声で) 沖田先生！

沖田 ヒッ！

松原、沖田の驚きを見て笑い転げている。

沖田 酷いじゃないですか、斉藤先生。

斉藤 沖田先生、結構恐がりだな。

沖田 恐がりじゃなくて驚いたんです。ジェイソンと同じですよ。

松原 言い訳してますね。

沖田 ほら、次松原先生ですよ。

松原 はいはい。怒られた。

松原、駒を振り、止まったマスの指示を読み上げた後、指示に従う。クリアする直前、わざと躊躇ってみせて、スピーカーに時間差攻撃。数秒待った後、クリアすると、やはり鐘が鳴る。四人、呆然とスピーカーを眺めている。

齊藤 …やっぱり誰かいるんだよ。松原先生が行った時、隠れてたんじゃないか。教師

をからかうとは。

沖田 でも何でこっちの声が聞こえるの？

永倉 悪戯同好会の仕業でしょ。どうせ。

松原 まずいですよ。生徒に見られてたとしたら。

齊藤 俺が見て来る。…そうだ。次、沖田先生の番だったね。続けてくれる？

沖田 はい。

齊藤 永倉先生、今度また鳴ったら、大きな声で知らせて。

永倉 へいへい。

齊藤、駒を振り、止まったマスの指示を読み上げた後、指示に従う。するとやはり鐘が鳴る。

永倉 (廊下に) 鳴りましたー。

沖田 マジ？

齊藤、戻ってくる。

松原 間違いないですね。あのチャイムはこの双六と連動しています。

斉藤 何、この双六。

永倉 これ、何処にあったの？

松原 双六同好会の部屋に。

沖田 …やめますか？

斉藤 いや、面白い。続けるよな。松原君。

松原 当然！

斉藤、賽子まきこを松原に渡そうとして持ち上げるが、動かない。

松原 へっぴり腰ですか？

松原が賽子まきこを持つと簡単に持ち上がる。

斉藤 それを言うならぎっくり腰こりこりこしたろ。それも違うけど。あれ？

松原 さあ、気を取り直して。

松原、賽子を投げ、駒を動かし止まったマスのお題を読む。

沖田 『誰かの縦笛を吹く』

松原 縦笛？

永倉 ここには俺と斉藤先生しかないない。

沖田 何言ってるんですか。音楽で生徒が使ってる奴でしょ。

松原 ああ、リコーダー。

斉藤 生徒の机ん中にあるでしょ。これは楽なお題だね。

松原 探してきます。

松原、出ていく。

沖田 斉藤 …昔の生徒が作ったんだな。いかにも子供が喜びそうなお題だ。でも、教え子の縦笛舐めるって、セクハラですよ。

斉藤 セクハラ研究会でもそこまでしないよ。

松原 ありました。

斉藤 永倉先生やった口でしょ？ 子どもの頃。放課後誰もいない教室で。

永倉 俺はブルマでしたね。

斉藤 ブ…。舐めるの？

永倉 いやいや、匂いだけですよ。

沖田 今でもやってそう…。

永倉 そんなにしてません。

沖田 変態。

松原 あの、僕は仕方がないから吹くんですよ。

斉藤 とか言いながらその縦笛はミスミぶろ中、二年五組の城野まどかのじゃないか。

永倉 ホントだ。

松原 ええ？ 気づかなかった。たまたま見つけただけで。

沖田 二年五組って確か。

永倉 四階の端。

齊藤 全力疾走して行って戻って来たのか？

沖田 え？ 狙ってたとしてもこの短い時間に席を探すなんて…。

永倉 だから、知ってたんでしょ。城野まどかの席。

齊藤 確信犯。

沖田 信じられない。

松原 誤解ですよ。落とし物入れの中にあつたのを適当に。

齊藤 ふーん。

松原 何ですかその、電車の中で大声で電話してる人見るような目は。知りませんよ。

松原、リコーダーを吹く。

時間経過。結構飲んだ跡。

松原 僕、そろそろ帰ります。

沖田 何よー。途中棄権なしでしょ。

松原 だって、これ、いくつマスあると思ってんスカ。何日あっても無理スよ。

斉藤 まだこんな時間だよ。

永倉 あの時計、止まってますよ。六時なわけなんですし。

沖田 じゃあ、お開きにしましょうか。

永倉 チェ。そろそろ脱衣系来ると思ったのになあ。

沖田 …。

永倉 何？

沖田 いえ。松原先生。急いでるんですたら、いいですよ。ここ片づけておきますから。

松原 いいですか？ すいません。お疲れ様でした。頭痛で。

斉藤 お疲れー。

松原、千鳥足で職員室を出ていく。

斉藤 久々にムキになって遊んだなあ。

沖田 永倉先生、こんな遅くなって、奥さんに怒られませんか？

永倉 俺、独身。

沖田 ああ。

永倉 ああ？ 何その、ああ。

沖田 いえ。意味は。

永倉 顔ふーん。

沖田 …。

永倉 嫁さんに逃げられたんだ。

沖田 ああ。

永倉 だから何その『ああ』は？

沖田 いえ、別に…。

永倉 そう。ていうかさ、自分の方こそいいの？ 時間。

沖田 別に。ひとりですから。

永倉 あ、ひとり暮らし。じゃあ、この後沖田先生の部屋で、ふたりで飲み直しだな。

沖田 何言ってるんですか。

永倉 いやさ、うち、今、風呂使えないから。

沖田 何勝手に風呂使おうとまでしてるんですか。

永倉 質に入れちゃって。…何？ 男が待ってるとか？

沖田
いいえ。

永倉
ならいいじゃねえか。風呂貸せよ。

沖田
貸せよ？ 全然親しくもないのに、何馴れ馴れしく…。永倉先生ね、評判悪いですよ。
そんなだから…。

永倉
…何？

沖田
いえ。

永倉
そんなだから何？

沖田
…前の学校にいられなくなったんじゃないんですか。

永倉
…。

沖田
校長と知り合いだそうですね。羨ましいコネクションをお持ちで。

永倉
コネクションって。またそんな難しい言葉使って。

沖田
別に難しくないでしょ。…前の学校で、何やらかしたんですか？
まあね。

沖田
生徒をつまみ食いした。

永倉、不敵に笑う。

沖田 …最低。

永倉 そんな勇氣ないよ。自分の教え子がひとり不登校になった。

沖田 で？

永倉 それだけ。

沖田 それだけ？

永倉 いなかったんだ。それまでその学校では。珍しいだろ。今日日不登校の生徒が多い学校なんて。学校側がさ、今までそんな生徒は出なかったのに、これは担任の責任だっつてよ。その学校で俺教鞭振るえなくなった。

沖田 それだけで？ 何か不登校の原因になってるんじゃないの？

永倉、沖田を睨む。

沖田 何よ？

永倉 学校側はそういう見解なんだろうな。

沖田 ？

永倉 でさ、失業したと思えば、嫁さんにも逃げられてさ。人生上手くないかないわ。沖

田先生は他の男にプロポーズされるし。

沖田 何で知ってるんですか。

永倉 結婚するの？

沖田 永倉先生に答える義理はないと思いますが。

永倉 ないよね。

永倉、壁の時計で時刻を確認。七時三十五分。

永倉 あの時計、止まっている？

沖田 え？

永倉 九時回ってるだろ。幾らなんでも七時半なわけ…。

永倉、腕時計を確かめる。

永倉 あれ？

沖田 七時三十五分ですけど。

永倉 合ってるのか？

松原（声） うわあ！

間。

沖田 今の松原先生？

沖田と永倉、走って出て行く。暗転。

四人の時間で半日程経過。斉藤、トランシーバーを持っている。

沖田 （トランシーバーに）わかった。ありがとう。松原君、戻って来て。

斉藤 どうだった？

沖田 新校舎の一階は全部駄目って。

斉藤 そっか。松原先生の言った通りだな。

沖田 どういうことなんです？ 松原先生の話、いまち把握できなかったんですけど。

斉藤、ホワイトボードに図を書く。

斉藤 うちの学校は校舎がカタカナのコの字になってて、開いてる一边を塞ぐように体

育館が建ってる。例の見えない壁は校舎を四角く囲むように存在してる。だから中庭には出ることができるけど、体育館には行けない。校舎と中庭。それが我々に与えられた領域…。

沖田 どうなってんの？

永倉、双六の取説を読んでいる。

永倉 やっぱりこの双六のせいみたいですわね。

斉藤 は？

永倉 読みますよ。なお、一度この双六を始めると、あがりに辿りつくまで時間が止まってしまうなり、一定範囲から外に出ることができなくなります。最後まで諦めず

に頑張りましたよ。

沖田 そんなわけないでしょ。

永倉 普通に考えればね。

斉藤、窓の外を見ている。

斉藤 すぐそこには外は存在するのにな。これじゃ映画のカキワリと何ら変わりやしない。

沖田 これって、閉じこめられてるってこと？

永倉 ですね。

沖田 いつまでももたないよ。第一食べ物なんか…。

斉藤 購買部と食堂に幾らかはあるだろうし。

永倉 それと調理実習室と。教師の準備室にも何かあるかも知れない。

斉藤 米俵研究会の部室に米俵があったはずだ。

松原 そんな部があるんですか？

斉藤 去年は県大会ベスト4まで行ったらしい。

沖田 あと、家庭科室にもあるし、教員の準備室にはみんな冷蔵庫持ち込んでますよ。

齊藤

最低限の生活は保障されてるわけか。とにかく、ここには四人しかいないんだ。ふたりが戻って来たら、いろんなこと決めないとな。

暗転。

明転。

永倉、煙草の箱を沢山抱えて登場。

松原

どうしたんですか、それ。

永倉

宿直室にあった。用務さんが買いだめしてたみたいだな。あ、クリアしたの？

沖田

ようやく、私の番だ。

齊藤

何巡目なんだろ。時間は止まってるけど、計算では七日経ってるんだよな。七日で全体の三割も進んでないなんて。

永倉

ま、時間は腐る程あるわけだし。のんびりいくしかないでしょ。

沖田、賽を振り。出た目の数駒を進め、銀を剥がす。

松原 『今後一度だけ、全員の駒を先頭の駒のいるマスまで移動できる』？ え？ あ、成程。

斉藤 いいぞ。ということは私ら三人が松原先生のいる所まで行けるわけか。

沖田 これでみんな一気に進みますね。よし。じゃ…。

永倉 言うな！

松原 何ですか？

沖田 いいよ、松原先生、聞かなくて。

永倉 いいから聞け。

沖田 命令しないで。

永倉 この双六。同じことが書かれてるマスは今までなかった。多分、残りのマスも全

部そうだ。

斉藤 ああ。で？ 何？

永倉 その全員の駒を先頭の駒のいるマスまで移動できるっていうのも、おそらくここだけだ。

松原
で？

永倉
その権利を取っておくんだ。そうしたらこの中の誰でもいいからひとりがアガリに辿り着けばいいことになる。

松原
そっか。今までだと、さっきみたいな『誰かを五〇マス戻す』なんてマスに当たっ

た場合、遅れてる人をアガリから遠ざけるわけにかなかったから、一番進んでた永倉先生が犠牲になったけど、これからは。

斉藤
ひとりが頑張ればいい。

松原
沖田先生、取っておきましょう。

沖田
…。

永倉
相当嫌われてるんだな。

暗転。

斉藤、賽を振り駒を進める。

斉藤
『この先、疑り深くなる』

松原 何これ。どういふことスカねえ？

鐘が鳴る。

沖田 よくわからないけど、斉藤先生疑り深くなってるわけだ。

松原 じゃあいんじゃないスか？ 鐘も鳴ったんだし。

斉藤 嘘？ 鳴ったか？

松原 今鳴ったでしょ。

斉藤 ええ？ 鳴った？

沖田 次松原君。

斉藤 嘘？ 松原君か？

松原 だって今斉藤先生の番だったでしょ。

永倉 成程。こういうことか。

斉藤 ああ、で、何で次が松原君なんだ？

永倉 ずっとその順番じゃないですか。最初に決めた時から。

沖田 うわ、この先鬱陶しそう。

斉藤 今、仏教思想って言わなかったか？

沖田 言いません。

斉藤 言っただろ。どういう意味だ？

松原 こっちが聞きたいよ。

沖田 言っていないですから。

斉藤 おかしいな。

松原 じゃあ投げます。

斉藤 ちよつと待て。

松原 ？

斉藤、松原の持つ賽子を間近で観察する。

斉藤 本物か…。

松原 何疑ってるんですか？

斉藤 ……賽子すり替えたように見えたから。

松原 どうやって？ こんな、でかい！

斉藤 私を疑ってるのか。

松原 疑ってるの先生でしょ！ もう投げますよ。

斉藤 何でそんな急ぐんだ？

松原 急ぐって別に何も…。

斉藤 早く賽を振らなきゃ、まずいこともあるのか。

松原 な、ないですよ。いい加減にして下さいよ！

斉藤 疚しいことがないなら何故そんなむきになるんだ。君の背後で誰が糸を引いている？

松原 沖田先生助けてよ。

永倉 松原先生で合ってるんです。

斉藤 ははん、さては誰かを庇ってるな。そうだと、松原先生。…ていうか、自分、松

原先生か？

松原 何言い出すんだ、この親爺。

斉藤 そういう映画があったよなあ。気づけば自分の周りの人間の星から来た生き物に乗っ取られていく話。（あさって）おい、そこにいる奴、出て来いよ！

沖田 誰もいませんって。いい加減にして下さい。

暗転。

沖田賽子を振り、出目の数進む。そして銀を剥がす。

斉藤 『人生最大の罪を告白する』

永倉 罪ねえ。

斉藤 多分、適当なことを言っても鐘は鳴ってくれない…かな。

永倉 始めて下さい。沖田先生。

松原、戻って来る。沖田先生のお題の内容は止まったマスを見て確認。

沖田 人生最大の罪？ 何でこんなこと話さなきゃならないの…。

斉藤 勿論、誰にも言わないから。

沖田 ええ？ でも…。

斉藤 何だ、疑り深いな。

永倉 あんただろ。

沖田 …中学のときに、いじめがあつて。私も一緒になつて、いじめのグループにいて。

その子、転校生だったんだけど。その子に一万持つて来いって言つて。それで化粧品買って。みんなに虐められてたから、その子すぐに転校して、それは一回だけなんですけど。

…。

三人
沖田 話しました。

松原 …鳴らないな。

沖田 でも話しました。

永倉 だから鳴ってないんだって。

斉藤 それは先生にとって本当に一番の罪なのか。

沖田 え？

斉藤 もっと罪深いことをほかにやってるんじゃないのか。

沖田 もっとつて。

永倉 いつになく鋭いな。斉藤先生。この鐘つてさ、どういう仕掛けで鳴ってるのか知

らないけどよ。知能があるみたいだ。ここにいる四人の心の中を見透かしてる。沖田先生言っていましたよねえ。何か目線みたいなものを感じるって。

斉藤 え？

永倉 もしかして、このゲーム自体が俺らのことを監視してるんじゃないか。

松原 永倉先生。そんな非現実的な…。大体きょうは二十一世紀なんですよ。

永倉 わかってるよ。…何で今日って限定…。自分でも言ってるばかばかしいんだ。じゃ

あ松原はこの状況をどう説明するんだ。

斉藤 まあまあ。理由なんて誰にもわからないじゃないか。

永倉 で、どうなんだ。

沖田 な、ないわよ。

斉藤 ここであったことはみんなゲームが終わったら忘れること。沖田先生、確かに罪

深い過去なんて、無駄毛処理の最中くらい覗かれたくないだろうよ。けど、ずっと黙ったままじゃ、日は昇らないんだよ。

沖田 だから私は。

斉藤 それともここに永住するのか？

永倉 まともなのか、おかしいのか、判別つかんな、この人。

沖田 あっても覚えてないのよ。

斉藤 本当か。言えないだけなんじゃ。

沖田 どうしてそんなこと言うんですか。

斉藤 沖田先生のためなんだよ。

沖田 …高校の頃、友達とグルになって、同じ塾通ってた大人しい子を脅して、援交勧めた。

私たちはその仲介料を10万ずつ貰った。

やっぱりあるんじゃない。

何なんだよ！ この双六！

るさいな。でかい声出すなよ。

斉藤 わ、若い頃の過ちは誰にだってある。お、俺だって一度はグルになろうと考えた

ことも…。

永倉 意味が違う。

沖田 慰めはよしてよ。明らかに狼狽してるじゃない！ みんなだって心の中では軽蔑

してるんですよ。

永倉 そうだよな。可哀想なのは売春させられたクラスメートで、沖田先生はただの加

害者なんだ。

松原 永倉先生！

斉藤 でも何でもみんなの過去がこの双六にはわかるんだ？ 人格が備わってるとしか思

えない。

沖田 早く次振ってよ！ とつとと帰りたいのよ。

永倉 それが…、賽が動かない。

沖田 …何言ってるのよ。

沖田、永倉の代わりに賽を持つとつとするが、重くて動かない。

松原 そう言えば、鐘も鳴ってないですよ。

沖田 何で？ 話したじゃない！

斉藤 沖田先生、あるんじゃないのか。もっと酷い罪が。

沖田 ないわよ！ これ以上。

松原 だけど、鐘が鳴らない以上、確かに先生の番はまだ終わってないってことに。

沖田

ないって言ってるじゃない。その後は、まともにやってきたんだから。昔の友達とはみんな縁切って、過去隠して、大学でもちゃんと勉強して、誰に後ろ指指されることもなく、教師ってまともな仕事に就いて、生徒相手に授業してるじゃない！

鐘が鳴る。

斉藤

…鳴った。

沖田

…遅れることなんてなかったのに。

永倉

今、言ったからでしょ。

沖田

何よ！ どういう意味よ！

永倉

先生が子供を教育することが、一番の罪だということか。

松原

永倉先生！

永倉

俺じゃない。この双六の代弁をしたまでだ。

沖田

あそ…。あつそ…。

斉藤

ただ遅れてただけだ。気にするな。

陰悪なムードの中で双六が続けられる。暗転。
明転。

松原 どうとう、ここまで来ましたね。

斉藤 沖田先生。

沖田、賽を振る。

三人 『出目の数』！

沖田、数を数えながら駒を進める。

松原 さあ、先生、銀を剥がして。

斉藤 ここまで来れば、酷い内容の命令が書かれてても、恐くないな。

永倉 怖いよ。

松原 怖いですって。

斉藤 何だよ、そんな。…怖いよ。うん。怖いけどさ。

沖田、微笑む。

斉藤 さあ、先生。

沖田 こんなにドキドキすること、最近なかった。

松原 先生、早く。

沖田 ようし。

全員、見つめる。

斉藤 『ふりだしに、戻る』

全員。止まる。

斉藤 あれ、目が疲れてんのかな。

沖田 ははは。

松原 僕が読みますよ、えーと、『ふりだしに、戻る』

全員。止まる。

松原 あれ、目が疲れてんのかな。

沖田 ははは。

斉藤 俺が読もう。えーと。

永倉 もういいって！ 逃避するな。

松原 ……そういえば、今まで、これなかったなあ。

永倉 何となくそんな気がしたんだよな。『出目の数』出たとき。

沖田 もう嫌！ 何で、こんなこといつまで続けなきゃなんないのよ！ 馬鹿にするの

にも程があるわ。ここまで来るのに一体、何日かかったと思ってんのよ。くそ！

松原 沖田先生って、ホント引きが悪いですよね。

沖田 (松原の襟首を掴んで) そんなこと言うんだったら、ここまで来てから言えよ！

松原 ここまで来たってあがれなきや同じだよなあ。

沖田 あんた、まだ一度も半分超えてねえじゃねえの。あ？ ホント、よく言うよ。ひ

とつのお題クリアするのに六日もかかったくせによ。

松原 だって『浮く』なんてお題、時間かかって当然だろ。てか、普通頑張ったって浮

かないよ！

永倉 もう一度頑張ればいいだろ。

沖田 もう一度？ 次もまた同じ所に止まったら？

永倉 そのときはまた。

沖田、急に狂ったように笑い出す。

沖田 何でそんな冷静でいられんだよ。

永倉 だって他に方法がないんですもの。

沖田 先生らだけで、勝手にすりゃいいじゃない。

松原 あのねえ。順番守らないと、賽子、振れないの。誰かひとり欠けても続けられな

いんだってば。

沖田 …もういい。もういい！ こんなゲーム。斉藤先生が見つけてこなかったらこんなことにならなかったのに。

斉藤 沖田先生だって、乗り気だったじゃないか。

沖田 こんなことになるってわかったら、ハナからやんなかったよ。

永倉 そうやって事態が悪くなれば、誰かのせいにするのか。おまえ、塾の子売ったときも、そうやって悪い友達のせいにして逃げたんだろ。

沖田 …。

永倉 答えろよ。

松原 永倉先生！

沖田 あんたは神か。

沖田、去る。

松原 (永倉に) ちょっとキツ過ぎじゃないですか。

永倉 松原君だって結構言ってたよ。

松原 一緒にしないで下さいよ。確かに短気になってましたけどね。あんた程無神経じゃ

ない。沖田先生出てったじゃないスカ。

齊藤 いや、あれはうんこ？

松原 疑えたら何でもいいのか。

永倉、賽を振り、銀を剥がす。

永倉 『右手で右の手首を掴む』か…。

松原 あ、それって、絶対不可能ですよ。

永倉 そうか？

松原 だってほら、右手でどうやっても…。

永倉、試そうとする松原の右手首を掴む。鐘が鳴る。

松原 え？

永倉 自分のとは書いてない。

松原 ああ。

斉藤に賽を渡す。斉藤、駒を進めて銀を剥がす。お題は『にによる』。

斉藤 『にによる』？ 何だよ！ にによるって？ 動詞なのか？

その頃沖田、廊下で風に当たっている。

斉藤 私、どうすりゃいいんだよ。

永倉 によによるしかないんじゃないですかあ。

斉藤 だからによによるの意味がさ。

永倉、職員室を出る。

松原 ニュアンスでこういう感じかなってないですか。私がありますけど。

斉藤 え？ あんの？

松原 自分なりにによによるしか。

斉藤 …ええ？

斉藤 考える。そしていきなり、

斉藤 によによー！

鳴らない。

斉藤 違うか。…によ、によーん。

鳴らない。

斉藤 ♪によによによーによによによによーによによによ。

松原 あもう全然駄目。

斉藤 何、他人事と思って。あんたもやれよ。

松原 え？

斉藤 そんなんじゃないってわかるんだろ。じゃあ、やってみせてくれよ。

松原 お、俺の番じゃないんですから。斉藤先生がやらなきゃ。

斉藤 …によによによっ！ …によによによっ！ …によによによっ！

鳴らない。いろいろ試す。永倉、廊下の沖田のもとへ現れる。

沖田 自分で間違ってるの、わかってた。でも…。

永倉 何で断らなかった？

沖田 …。

永倉 自分で間違ってるってわかってて援交勧めた？

沖田 あんたに関係ないでしょ。

永倉 関係ないことない。

沖田 いいえ。私と先生は全く無関係です。

永倉 俺の生徒だったんだよ。

沖田 ？

永倉 おまえの言う塾の友達。

沖田 え？

永倉 俺、最初は高校で教えてた。その子なあ、その事件以来引き籠もっちゃってさ。見

知らぬ親爺に犯されそうになったから？ 違うな。友達に裏切られたからだ。誰

も信じられないって。

沖田 怖かったんだよ！ だって、調子合わせなきや、すぐにこっちが外しの対象になる。

もう、イジメられるのやだったから。実際断ったのに、脅されてて。やらなきや、

おまえ売るって言われて。でも、どうしても嫌だったから、あの子が本当にやら

れちゃう前に、ホテルに着いたらすぐに、隠れてた私らが親父気絶させて金だけ

取って逃げたんだ。ホント言うと、そのこと、今日まで、全然忘れることができなくて。

でも…。

永倉 ……謝れよ。

沖田 ……ごめんなさ…。

永倉 俺にじゃねえよ！ その子にだよ！ その子は今も、病院に通ってる。他人のた

めにこれ以上人生台無しにされたかないよな、もう二十五だ。普通の生活しながら、

普通の生活続けるためにカウンセリング受けてるよ。行って謝って来いよ！ 自

分の代わりに犠牲になってもらってすみませんでしたって、そんな私がのうのう教師なんかやっててすみませんでしたってよ！

沖田 ううう…。

永倉 教師をやったことを言ってるんじゃないよ。のうのうとやってることがだよ。

沖田 …。

永倉 おまえさ、苛める側の気持ちも苛められる側の気持ちも知ってるんだろうが。おまえみたいな奴が教師になるべきじゃないよ。双方理解できるんだからよ。…俺にはわからなかった。それが公務員は安定してるだの、生徒に嫌われないよう要領かまさなきゃ馬鹿だの言ってるから鐘が鳴るんだろ。あの鐘で教師辞めるなんて考えてないだろうな。

沖田 だけど。

永倉 まだ、その子が学校に来るとき…、仲のいい塾の友達の話が聞かされたことがあった。その子は、ええと、明るくて、頭も良くて、ピアノ上手くて、人気あったのに、自分みたいな地味でダサイのでも友達になってくれて。…憧れだったってなあ。

沖田、しゃがんで、顔を手で覆う。

沖田 それが原因で、その学校クビになったんだね。

永倉 うん。あ、でもその前にシャワー室覗いて見つかったりもしたけど。

沖田 …。

永倉 やっぱそっちなかな？ あれ？

沖田 …私がその塾の友達だって、ここに赴任して来た時から知ってたの？

永倉 ああ。親御さんから写真貰ってたから。

沖田 何で今まで言わなかった？

永倉 …綺麗な顔だったし、このネタで先生の体、強請る計画立ててて。でもみんなに

知られたから無理か。

沖田 …。

永倉 …。

沖田 私って、いろんな人の人生滅茶苦茶にしてるね。

永倉 そうだね。

沖田 どうやって謝ったらいいの…。

永倉 土下座研究会に相談してみろ。

沖田 …戻って謝る。

永倉 そ。

沖田 永倉先生…。

永倉 ？

沖田 私が教師辞めなかったために言ってくれてるんだろ。

永倉 …おまえが賽子振らないと順番止まんだよ。

永倉、職員室に戻る。

職員室。まだによによるを試しているふたり。

永倉 …まだ、やってたのか。

斉藤 …によによーによによー！（そんなこと言ってもなあ）

松原 …によによーによーによー！（わからないんですから）

永倉 わかんねえって。によによによによによによによいわれても。

斉藤

こんなのわかんねえよ。大体、卑怯だぞ。日本語じゃねえだろ。この前もハングルで書いてやがったし。ていうかハングルが何かすら知らなかったのに。あれ訳すのだって図書室に籠もって…。

鐘が鳴る。

斉藤

だから何で鳴るんだよ。ああもう！

松原

まあ、でもクリアできたんだし。

斉藤

腑に落ちんわ。結局によよるってわからないじゃねえか。今の私の行動の何処がによよってたんだ？ ああ、もう。

松原

まあまあ。斉藤先生、そんなによよらないで。

斉藤

ああ？

暗転。

明転。沖田のみ職員室。松原登場。お題は、松原の『卵まるのみ』。

松原 何処にもないよ。卵。くそ、まるのみじゃなくてもいいなら、購買部に玉子サンドがあつたのに。

沖田 すぐそのスーパ―にはあるんだろうなあ。

松原 すいません。沖田先生。もう、駄目だ。クリア不可能だよ。『卵まるのみ』。

沖田 何処かにあるって。絶対。

松原 だけどこれだけ捜してないんだ。食堂も購買部も家庭科室も教室も。

沖田 ほら、木を見て森を見ずって言うじゃない。

松原 森って、そんな卵、あつても飲めないし。ああ、もう。

沖田 へこむの勝手だけど、イライラ外に出さないでよ。こっちまで気が減入るじゃない。

松原 イライラもするでしょうが！ こんな毎日繰り返し返したら。買い物にも行けない、パチンコも行けない。セクキャバもデリヘルも。

…。

松原 そうだよなあ。いつまでもこんな禁欲続くわけないよなあ。沖田先生、もし、僕らが帰ることができないなら、選択肢って限られてますよねえ。

沖田 何の話？

松原 いいでしょ別に。

松原、沖田に近づく。

沖田 近づかないで。

松原 元に戻っても、あの話、黙ってますから。

沖田 卑怯者。

松原 好きなんです。

沖田 短絡的過ぎ。やめて。

永倉、ふたりの状況を扉の陰から覗いている。

沖田 永倉先生。

ふたり、飛び起きて、離れる。

永倉 席外してたほうがいいですか。

沖田 違うの！ 松原先生が無理矢理。

永倉 ええ。それは見てましたから。

松原 (永倉に言い訳するように) だって、こんななんだ。仕方ないでしょ。

永倉 うん。仕方ない。

沖田 ちよっと。

永倉 でも、抜け駆けはするい。俺も斉藤先生も性欲、表面張力起こしてるよ。

沖田 ちよっと！

松原 あんたと違うよ。気持ちがあるからこそ…。

永倉 長年最前に行っているダッチワイフにだって情は湧きますよ。

沖田 ダ…。

松原 一緒にするな。

永倉 あったよ、卵。

松原 え？

永倉 理科室に飾ってあった。

永倉、松原に卵を渡す。

松原 飾って…、これ何の…。

永倉 ユーレイカレエダカマキリ。

松原 カマ…。

永倉 マレー半島に生息だって。そうなんだよ。別に『鶏』って限定されてないんだ。卵は卵。

俺の着眼点を褒めて下さい。薫製って書いてたくらいだから食べられるでしょ。

松原 何言ってるんですか、これ、剥製じゃないですか！

永倉 ああ、剥製って読むの？ あれ。他にないんだから、仕方ないっしょ。

松原 こんなのが食えるわけじゃないじゃないスか！

永倉 生きてる方がよかった？

松原 どっちにしたってカマキリなんて。

永倉 食わなきゃ、鐘鳴らないんだから。

松原 だったら先生これ食えますか！

永倉 てめえのお題だろ。

松原、びびる。

永倉 はい、アーン。

永倉、少ししか開けない松原の口に卵を無理矢理押し込む。松原、飲み込む。鐘がなる。

永倉 お、頑張った。

松原、吐きそうになるのを慌てて手で押さえて、職員室を出ようとするところへ。斉藤急いで戻って来る。

斉藤 博多研究会の部屋に、明太子が入ってたんだけど、これもたまごだよ！ 松原君！

松原、恨めしい苦笑を浮かべて教室を出ていく。

斉藤 あれ？

永倉 あ、もうクリアしました。

斉藤 そうなの？ 何だ。いい着眼点だと思ったのに。

永倉 松原先生は立派でした！ はい次、沖田せんせ。

沖田
…。

永倉
何？ 早く賽子放れよ。

沖田
…うん。

暗転。

明転。齊藤の駒、あがりのすぐ側まで来ている。松原、腹痛に苦しむ。

沖田
よし。

齊藤
『一度だけ、命令をパスすることができ』これも残ってる。

永倉
ええ。

松原
齊藤先生、さあ、賽子を。

齊藤、目頭を押さえる。

永倉
齊藤先生？

斉藤、みんなに頷いて賽を振る。

斉藤 『出目の数』。

※六なら

全員 行った！

※六以外なら

全員 惜しい！

沖田 『ふりだしに、戻る』…斉藤先生！

斉藤 …。パ…ス。

鐘が鳴る。全員、肩を抱いて喜び合う。

永倉 これであとひとつ。何を出してもあがり。

松原 ええ。取説にも、オーバーしてもあがりだって書いてます。

斉藤 本当に書いてるのか？

松原 何でそんなこと…。

斉藤 今、ろくに見ないで書いてますなんて言うからさ。

松原 書いてるでしょ、ほら。ほらほらほら！

斉藤 これ松原君書き足してないか？

松原 活字でしょうが！

永倉 まあまあ、そんなにによらないで。

松原 によよってない！

斉藤 そっか。遂にここまで。これで本意に反して疑うこともなくなっていい。

松原 自覚はあるのか。…これで、今度こそ。間違いなく、確実にあがれるんスね。痛てて。

沖田 ちよっと、その痛がり方、普通じゃないんじゃない？

永倉 腹の中で孵化したんじゃないか？

松原 え？

永倉 ちっちゃいカマキリが、外に出たいよーってさ、お腹の中、ちよつとずつ切つて

るんじゃないか。

松原 辞めて下さいよ！

永倉 ちっちゃいのがうようよいるのと、これくらい（赤子サイズ）のが一匹宿ってる

のとどっちが嫌？

松原 どっちも嫌！ 宿ってるって言ふな！ 痛ててて。

斉藤 辛いならツツコまなきやいいのに。

沖田 やつと元に戻る…。

永倉 まだ泣くなよ…。もうちよつとだろ。

沖田 うん。

斉藤 松原君。

松原、賽を振る。

松原 『出目の数』。

全員 いち、に… 『出目の数』。

沖田 『右隣の人の頬を抓る』

松原 斉藤先生、今まで何度も何度も何度も何度も抓って、すみませんでした！

斎藤 松原先生、いつも同じ所に止まるんだもん。

松原 何回抓ったか、もう、数えられないですよ！

斉藤 (笑顔で) 六回。

松原 …覚えてるんですね。でも、これで最後なんですね。じゃ、失礼します！

斉藤 いてててて (笑い)。

松原 いてててて (腹痛)。

鐘が鳴る。

松原 さあ、沖田先生。

沖田、賽を振る。

沖田 『出目の数』。

全員　いち、に、…『出目の数』。

沖田、みんなのかけ声に合わせて赤い駒を動かす。沖田、銀を剥がす。

斉藤　どうしたんですか、沖田先生。

沖田　目が涙で。

斉藤　嘘？

松原　だから何でそんなところで嘘つかなきゃならないんですか。最後までこの調子？

沖田　斉藤先生、読んで下さい。

斉藤　ええ。

間。

沖田　斉藤先生？

斉藤　『全員、ふりだ…』

齊藤の台詞を遮るように、突然バッドエンディング的曲が流れる。永倉、齊藤、松原、スローモーシヨ
ンロパクで嘆きの演技。が、沖田の次の言葉が曲を止める。

沖田 待って！ 私も残ってる！

松原 …え？

沖田 だから、私も残ってるんだって！『一度だけ、命令をパスすることが出来る』権利が！

間。

齊藤 え？

沖田 だからパスできるの！

齊藤 嘘？

沖田 ホントだって！

間。

全員
ふうふう。

松原
あああ、ビックリしたあ。大体、何でこんな『全員ふりだしにもどる』みたいなのが最後まで開かずに残ってるんだよなあ。

斉藤
じゃあ、沖田先生。当然？

沖田
パスします！

鐘が鳴る。全員、息を整える。

松原
永倉先生がクリアしたら、あとは斉藤先生が賽を振るだけ。では、永倉先生。
永倉
ういっす。

斉藤
なあ、戻ったら、打ち上げしねえか。

松原
賛成！

沖田
ていうか、打ち上げだったんだよなあ。

斉藤
…あそっか。忘れてた。

松原
でも、その前に病院連れてって。

斉藤
…もう少しの辛抱だよ。

永倉、賽を振る。永倉、出た目の分だけ駒を進め、銀を剥がす。後の三人は話に気をとられている。

沖田 元の時間だと何時位になるんだろ。ほら、開いてる店あるかなって。

斉藤 駅の方に出たらあるだろ。

沖田 駅か。長いこと行ってない。

斉藤 どうだか。

松原 ここまで徹底して疑い深いと却ってよくなってきた。駅高架の工事してたの、綺麗になってるんじゃないスカ。

沖田 だから全然変わってないんだって。

松原 あ、そっか。…イテテ。

斉藤 いろいろあったな…。ホント、みんなお疲れ様でした。

松原・沖田 お疲れ様！

鐘が鳴る。永倉、動かない。

斉藤 いよいよ私の番だな。

沖田 あれ？ 永倉先生いつの間にクリアしたの？

永倉 …。ああ、おう。楽勝楽勝。

斉藤 野郎共行くぞ！

松原 おおお！

沖田 永倉先生？ 何て書いてたの？

永倉 え？ ああ。『思い出し苦笑いをする』って。

沖田 本当？

永倉 ほんとって？ あのなあ、沖田先生まで斉藤先生の伝染ったのかよ。

永倉、さりげなくマスを隠している。永倉が嘘をついていることに気づいている沖田。

沖田 松原先生！

松原、確かに容態が悪化している。永倉、松原の方に気を取られる。しかし、沖田が叫んだのには別の目的があった。永倉の油断を誘うという目的が。

沖田、素早く永倉の手をどけ、百人一首の手練れさながら、永倉が隠そうとしていたマスから距離を置かせる。

沖田 …『思い出し苦笑いをする』は出たよ。序盤で。この双六、二つと同じ文章は書か

れていない。教えてくれたの、永倉先生よ。

沖田、マスに書かれた文字を読む。

沖田 『二巡するまで、全ての効果を受け付けない』

永倉 …。

沖田 嘘…。

斉藤 これって沖田先生の『今後一度だけ、全員の駒を先頭の駒のいるマスまで移動で
きる』権利も永倉先生には無効ってことか？

松原 そんな…ばかな。

永倉 ハハハ。

沖田 …どうしよう。

斉藤
考えよう。

松原、腹痛が酷く、虫の息。

永倉
…みんな、先にあがって下さい。

斉藤
…いいのか？

沖田
いいのかじゃないよ。斉藤先生がここまで来れたの、永倉先生のアドバイスがあつたからじゃない。それに、私が『今後一度だけ、全員の駒を先頭の駒のいるマスまで移動できる』のマスに止まったとき、全員であがる作戦考えたのも永倉先生だよ。それをいいのかつて。あんまり過ぎるじゃない。

斉藤
だったらどうすんだ。振らなきゃ、待ってるだけでどうにもならないし、賽を振ったら、その時点であがり決定なんだ。

沖田
…わかつてるよ。…だけど、こんな形で、権利使えない。

斉藤
何言ってるんだよ。この期に及んで。

沖田
権利は私にあんの。

永倉
沖田先生。権利使え。

沖田 永倉先生？

永倉 シャーねえよ。こんなマスに止まった俺の運がなかったんだ。

沖田 嫌だよ。

永倉 あのなあ。次に誰かあがるのにどれだけかかると思ってるんだ。斉藤先生、賽を振って下さい。

斉藤 けど…。

沖田 …考える時間もないの？

永倉 (首を振る) このままだと、松原先生が死んでしまう。

斉藤 ていうか、死んでるんじゃないのか。

永倉 生きてるよ！ そこまで疑うな。

斉藤 …もう、賽を投げるぞ。

永倉 沖田先生、権利を使うんだ。

沖田 でも…。

永倉 斉藤先生、お願いします。

斉藤 …わかった。先に行ってる。

齊藤、賽を振る。賽の目は何が出てもいい。

齊藤 『出目の数』

齊藤 …いち。

齊藤、駒を進める。

齊藤 …あがった。

鐘が長い間鳴り響く。

永倉 沖田！ 権利の行使を！

沖田 先生！

永倉 早く！

沖田、お守りの千年アイテムを永倉に託す。

永倉

聖。ポキール医大。そこで毎週土曜日カウンセリング受けてる。ちゃんと謝って来いよ…。

沖田

先生…。

沖田、永倉から離れる。

沖田

全員の駒を先頭の駒のいるマスまで移動できる権利行使！

三つの鐘が鳴り響く。松原は意識を失い、斉藤に抱えられている。

永倉

…。

沖田と斉藤、永倉と対峙し、じっと見つめている四人とも最初と較べて遥かに格好良い。永倉小さく手を振る。去りゆく三人。見送る永倉。暗転。

明転。現実時間に戻って来た沖田達三人。斉藤は松原を負っている。

沖田 永倉先生…。

齊藤 救急車呼ぶより、松原君の車借りた方が早いな。沖田先生、（松原の）ポケットから車のキー出して。

沖田 うん。

齊藤 サンキュ。じゃ、行ってくる。

沖田 お願いします。病院着いたら何処の病院か教えて下さい。

齊藤 こいつの実家に連絡頼むわ。入院の手続きとかしなきゃならんだろうし。

齊藤、松原を担いで出て行く。

沖田 …だけど、永倉先生のことみんなにどう説明すれば…。実家の親御さんにも何て言ったら、だあびつくりした！

沖田振り向くと永倉がいる。更に荒んだ格好で。永倉、沖田の大声で初めて沖田に気づいた様子。

永倉 よう。久しぶり。

沖田 永倉先生、何で？

永倉 何でって、やっとあがったから。

沖田 え？ だって今別れたばかりじゃあ。

永倉 はあ。滅茶苦茶頑張ったのに。

車のエンジン音。

永倉 二人は元気にしてる？

沖田 松原君を病院に、今ほら斉藤先生が車で。

永倉 まだ病院？ お腹痛治ってないの！？

沖田 ああややこしいな。

永倉 何かね。

沖田 だって、ほんの十分前にあんな泣くわ喚くわして…。

永倉 こっちは。丸二年ね。

沖田 ずっと待ってたよ。

永倉
はいはい。十分な

間。ふたりとも次の言葉を考えている。

沖田
私達が帰ってから大変だった？

永倉
もう。後でゆっくり話すけどね。あの後変なお題ばかりで大変だったのよ。

沖田
何でお姐言葉？

永倉
ああ、ずっとこれだったから。癖になっちゃった。二年も経てば変わるよ。…二年ずって考えたんだけどさ。

沖田
うん。

永倉
俺…。

告白モード？

沖田
…え？

永倉 宗教起こすことにした。

沖田 …え？

永倉 ずっとひとりで暇だったからさ、悟りとか開いちゃって。教祖松原に頼むことにした。あいつ浮けるし。

沖田 何で！

間。ふたりとも笑っている。

沖田 …お帰り。

永倉 …ただいま。

暗転。幕。